被災地巡検で変わった私の考え

私はこの被災地巡検を通して地震と津波の破壊力、日常の大切さ、そして防災の重要性について学んだ。この三つについて詳しく話していく。

第一に、地震と津波の破壊力について述べる。私がこの被災地巡検で最も印象に残った場所は石巻市にある震災遺構大川小学校である。二階建ての大川小学校では、二階天井まで泥の混じった津波が押し寄せた痕跡が、茶色い染み跡としてはっきりと残っていた。他にも、コンクリートが剥き出しになっていたり、大きなコンクリートの柱が倒れていたりもした。案内をしてくださった佐藤さんの話から、海や川から逆流した津波が第一波、第二波、第三波と襲来するだけでなく、山に跳ね返って泥や木を含んで来るという津波の恐ろしさを知った。そしてその津波に飲み込まれた子供たちは、洗濯機の中にいる洗濯物のように津波に流さていく過程で着ていた服が脱がされ、色々なものにぶつかって、傷だらけの裸の状態で発見されるという胸を締め付けられる話も聞いた。また、同じ石巻市の震災遺構門脇小学校でも津波火災や教室の様子など衝撃的なところが沢山あった。これら二つの小学校は被災前、どちらも周辺に住宅街や病院、郵便局などがある普通の街だった。私はその話を聞いたとき、この場所にかつて私の住む街と同じような住宅があったとは、にわかには信じがたかった。この当たり前の日常が地震と津波で突然になくなってしまうことを私は痛感した。

第二に、日常の大切さについて述べる。いつも過ごしていた建物や街だけでなく、大切な家族や友人達の命も全て地震と津波で失われてしまう恐ろしさがある。特に私は家族を失ってしまう恐ろしさを感じた。「いってきます」「いってらっしゃい」の会話が最後となり、「ただいま」「おかえり」と声を掛け合うことができなくなってしまうこと。大好きな家族と過していた生活も突然なくなってしまい、大好きな家族に二度と会えなくなることが本当に起きてしまうということを想像すると、そんなことは絶対起きて欲しくないものだと思った。だからこそ、今ある幸せな日常を大切にしなければならないと強く実感した。そのためにはまず、いつもの生活で後悔を残さず、身の回りにある「当たり前」のことに感謝を伝えようと決意した。そして、被災地にもかつては私たちの生活と変わらない日常や楽しい行事があり、被災者数の数だけ、それぞれの名前と人生があったということを忘れずに語り継いでいくことが私たちにできることだと学んだ。

第三に、防災の重要性について述べる。この被災地巡検を通して、備えるのは物だけではないと学んだ。避難場所や避難経路はどこなのか、家族との連絡方法はどうするのか事前に決めておくことで、実際に地震や津波が発生したときに自分たちがどう行動すれば良いのかが分かり、自分たちの命を守る行動にも繋がる。私は一年生の探究の授業の中で、自分の住んでいる地域で地震が起きたときのためにどのような備えをしなければいけないのかを学習した。正直、その時の自分は防災に対して「自分事」として捉えていなかった。クラスメイトも備えておくべき物やハザードマップ見て「やばいね」「怖いよね」と言うくらいで、防災の大切さをしっかりと理解していなかったような気がする。防災を始めることはとても大

切なことだが、何のために防災があるのか、なぜ重要なのかをまず理解する必要があると考えた。なぜなら、防災の重要性を理解することで初めて防災を「他人事」から「自分事」として捉えることができると思うからだ。防災訓練でも、周りの人達が面倒臭いなと思って「他人事」のように取り組んでいるように見受けられる。防災訓練は、震災の時にどうやって自分たちの命を守るのかを示すと同時に、訓練の失敗が現実の災害で命を失うことに繋がりかねないという、その重大性を伝える必要があると考えた。この巡検で様々な方からお話しを伺い、地震発生から時間が経過したため津波は来ないと思い自宅に戻った方や、過去の地震で津波が来なかったという理由で避難行動を取らなかった方々がいたことを知った。些細な油断が命を失う結果に繋がりかねないという怖さを実感した。

この被災地巡検を通して、私たちは多くの人々の防災に対する意識を、「他人事」から「自分事」へと変えていく必要があると痛感した。もしこれまでの防災活動で人々の意識を変えることができていなかったのなら、どのように防災の重要性を伝えるべきか、改めて考え直す必要がある。そして私は、被災地で学んだことや感じたことをまず家族に伝え、私たち自身の避難行動を再確認することから始め、自らの命を自らで守る行動を実践していこうと思う。これからは、常に後悔を残さず、身近なことへの感謝を忘れずに生活していきたい。